

「わたしの教育記録」

特選 受賞作品 全文掲載

授業を作文で再生する

～授業中の子どもたちの思考過程の変化の様子が見えた！～

埼玉県日高市立高萩小学校 岡田 淳史

1 はじめに

授業を終えた私は、「今日は、たくさんの子どもたちが発言したし、私自身も子どもたちの考えを引き出しながら授業を展開することができた」と満足していた。しかし、次の日に授業をしてみると、前時のときに感じたほど子どもたちが学習した内容を理解していない。そして、落ち込む私。授業をしたことがある人ならば、誰しも同じような経験をしたことがあると思う。私は、この問題を解決する手掛かりを探そうと学習指導要領を取り、そこで見つけた「言語活動」が、「この問題を解決する糸口になるのではないか」と考えた。

2 仮説設定までの経緯

今後の研究方法と仮説を考えるために、まず、自分自身が子どもたちの何を観て、何を評価しているのかを整理することにした。

《観ている項目(○)と評価している内容(・)》

○発言回数

・学習意欲

・学習の理解度

○説明の仕方

・表現力(話す力、書く力)

・学習の理解度

○ノート

・学習意欲

・表現力(まとめる力)

・授業中の思考

○授業感想

・本時の理解度

すると、私がこれまでに評価してきたのは、流れていく授業の中にある点であることに気付いた。そして、「このままでは、子どもたちの思考が、教師や友達の働きかけによって、どのように変化していくのかを評価することができていない」ということが分かった。

今の問題を解決するために必要なのは、授業中に子どもたちの思考がどのように変わっていくのかを理解することであり、それに基づいて教材研究や授業の展開を工夫することである。

そこで、「授業中の子どもたちの思考過程を文章で表現させれば、個々の理解度を適切に評価することができるのではないか」と考えた。

3 仮説を検証する手立て

仮説を検証するために、算数の授業の内容について作文を書かせることにした。そこで、算数の授業の後に国語の授業を入れた。こうすれば、子どもたちは、今受けたばかりの授業を作文で再生すればよいので、「作文が苦手な子ども書きや

すくなるのではないかと考えたからだ。また、この時間を確保するために前時の板書を国語の説明文の題材とした。

4 再生作文について

(1) 事実作文から思考作文に ステップアップ

再生作文に二つの段階を設けた。はじめは「事実作文」である。これは、板書を手掛かりにして、どんな授業が行われたのか、事実のみを正確に再生する作文だ。

《事実作文のねらい》

- 子どもたちの集中力を高める
- この後に、「どんな授業をしたのか、作文に書かなければいけない」という状況をつくることで、意欲と緊張感をもたせる。
- 子どもたちの表現力を高める
- 授業を最初から順序立てて論理的に書かせる。

次の段階に進む条件として、クラスの7割以上の子どもたちが、事実作文を概ね書くことができることとした。クラスの実態を考えると、これ以上の条件を設定すると、次の段階に移るまでにかなりの時間を要することが推測されたからだ。

次の段階は、「思考作文」である。これは、事

実に基づいて自分の考えと友達の考えを関連付けながら再生する作文だ。

《思考作文のねらい》

- 教師が子どもの思考過程を知る
- 子どもたち一人ひとりの思考が、教師や友達の働きかけ（発問・つぶやき・説明など）によって、どのように変化しながら授業が進んでいったのかを知る。
- 子どもたちの表現力をさらに高める
- 図や表などを補足資料として使えるようにする。

(2) 評価規準を明確にすることで、

子どもたちの個々の課題を明確にする

この取り組みの要となるのが評価である。子どもたちは、評価を指針として作文の書き方を身につけていく。そこで、事実作文と思考作文のねらいに基づいて、次のような評価を行うこととした。

《事実作文の評価項目》

- ① 授業の内容を自分の言葉でまとめている。
- ② 作文の中で授業が完結している（授業の展開を正確に再生している）。
- ③ 文脈がつながっている（接続語を正しく使っている）。

《思考作文の評価項目》

- ① 自分の考えに友達の発言や考えを関連付けながら書いている。
- ② 補足資料として図や表などを用いている。

5 実践と子どもたちの 変容の様子

(1) 事実作文編

◆4月…評価を通して子どもたちを変えていく

子どもたちが初めて書いた作文を読んだ。すると、授業の流れが部分的に間違っていたり欠けていたりするのに、最後に正しいまとめが突然現れる。これは、本時の学習内容を正しく理解できていないことを意味する。また、作文の最後に「楽しかったです」と書く。これは、この言葉を書けば教師が喜ぶことを知っているからだ。私は、これらに該当する作文に赤ペンで、「作文の最後は、授業で分かったことを自分の言葉で書きましょう」とメッセージ（課題）を書いた。

そして、子どもたちの実態が分かった私は、次の授業から黒板に書くまとめの言葉は、子どもから出たままの表現にすることにした。ノートには、黒板のまとめを参考にして自分の言葉で書くことも伝えた。こうすることで、学習内容が分からないまま黒板のまとめを写している子は、作文を読めばその子の理解度が分かるよ

うになる。

また、2回目の作文を書かせる前に評価の規
準を説明した。

《まよめの書き方に対する評価規準》

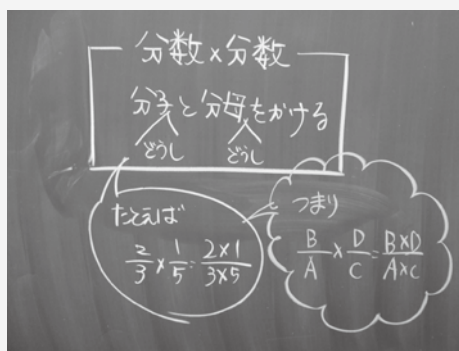
A：板書を参考にして自分の言葉で書いて
いる。

B：板書を少し変えて書いている。

C：板書をそのまま写している。

それ以降、作文の最後から教師を喜ばせる言
葉は姿を消していった。さらに、授業中の子ど
もたちに変化が表れた。不十分な内容のまま
まよめが板書されると「先生、ちょっと待つて、
それだと分かりづらい」とか、「だったら、○○
つて書いた方がいんじゃない」などと、自分たち
でまよめを考えるようになった。

〈子どもたちが補足したまよめ〉



◆5月：作文が苦手な子たちのパワーを

アップする

作文を書いていると、2〜3人の子どもたちが
手を挙げて、「先生、作文に図を入れてもいい
ですか?」と質問した。この子どもたちの言う
通り、作文に図を入れることで説明がしやす
くなり、内容も充実する。しかし、現在の時点では、
まだ約4割の子どもたちしか、事実作文のねら
いを概ね達成していない。この状態で図を入れる
ことを認めると、図が主役になり、文章はそれ
を補うためのものになってしまう可能性が高い。
それでは、本末転倒だ。子どもたちには、正直
に理由を説明してしばらく待つてもらうことに
した。

また、この頃になると、クラスの中に差が生ま
れてきた。作文が得意な子は文の量が多く、文
脈をつなげて書くことができる。一方、苦手な子
は、文の量が少なく、文脈がうまくつながらない。
そこで私は、休み時間に苦手な子たちを呼ん
で話を聞くことにした。すると、文の量が少な
い子は、「黒板だけだと、誰がどんなことを喋っ
た(説明した)のか全部思い出せない」という
理由を、文脈をうまくつなげられない子は、「文
のはじめの言葉(接続語)が分からない」とい
う理由を教えてくれた。私は、子どもたちに教
えてもらった課題を解決する方法と新しい評価
規準を考えた。

文の量が少ない子には、作文を書くときに板
書の他に自分のノートを見てもよいことにした。
文脈をうまくつなげられない子には、説明が上
手な友達と話すときに、最初に使う言葉をノー
トにメモしてもよいことにした。そして、新しい
評価の規準を説明した。

《作文の中で授業を完結させることと文脈を
つなげて書くことに対する評価規準》

A：作文の完結と文脈のつながりの両方を
クリアしている。

B：どちらか一つの項目をクリアしている。

C：どちらもクリアできていない。

例えば、Bの評価をつけた子には、「今度は、
授業のはじめの部分から書いてみよう」、もしくは
「段落の最初に順番を表す言葉を使って書いて
みよう」というメッセージ(課題)を書いた。す
ると、次第に文の量が増えたり、文脈をつなげ
られるようになってきたりする子が増えてきた。

〈文脈をつなげられるようになった作文例〉

3時間目に「値段はいくらかな」という
勉強をしました。

はじめに、先生が「筆箱が売られていま
す」と書いて、「値段はいくらかな?」と聞
きました。私は、「これでは答えが分からな

次に、「じゃあね、240円の本の値段をもとにすると、その3/2倍が筆箱の値段です」と付け加えました。これなら、図を使えば答えが求められると思います。（中略）

最後は、今日の授業で勉強したことをまとめることにしました。（略）

◆6月..ついに！作文に友達の考えや図を

入れる

5月下旬から、苦手な子どもたちの文の量も増え、全員が1枚半以上書けるようになった。得意な子は、3〜4枚程度書く。6月になってから1回目の作文の時だった。原稿用紙を配っている、一人の女の子が、「先生、そろそろ図を使いたいですけどいいですか?」と質問した。私は、わざと「どうして使いたいの?」と聞いた。すると、「だって、今日の授業は図がないと説明しづらいんです」と答えた。この返答をきっかけに、他の子どもたちからも「そうそう。図がないと不便です!」と、次々に必要感に満ちた声が上がってきた。

そこで、次回から思考作文に切り替えることにした。そのための新しい評価基準も考えて、子どもたちに説明した

《思考作文に対する評価規準》

A:自分の考えに影響を与えたつづきや説明を、自分の考えと関連付けて書いている。

B: 事実作文に自分の考えを書き加えている。

C: 事実作文を書いている。

作文を書くことに慣れてきた子どもたちの上達は速い。新しい評価基準を設けてから再生作文を2回書いただけで、約半数の子どもたちが、自分の考えに友達の考えや図を関連付けて書けるようになっていた。しかし、評価基準の言葉だけでは、具体的なイメージがもてず、どうや

〈友達の考えを関連付けて書けてきた作文例〉

(中略) 今までは、分数同士の比を比べると
きには、小数に直して比べていたけど、 $\square\square$
さんみたいに通分すれば、分子で比べるこ
とができることが分かった。これは、小数に直
すことができない分数でも比べられる便利
な方法だ。さっそく、次の問題で使ってみた。
そしたら、今までよりも速くて簡単に答え
を求めることができてうれしかった。(中略)

◆7月..思考作文の宿題化を目指す

そして、彼らの作文を見せながら、どのように書けばいいのかを説明した。効果はすぐに表れた。翌週から作文の内容がほとんど変わっていった。6月最後の作文では、クラスの68%の子どもたちがA評価を取れるようになった。その結果、作文を読めば、彼らの授業中の思考過程や学習内容に対する理解度を以前よりも正確に把握できるようになった。

研究計画では、10月から再生作文の宿題化を目指す予定だった。しかし、実際は私の予想以上のスピードで子どもたちが上達した。7月で

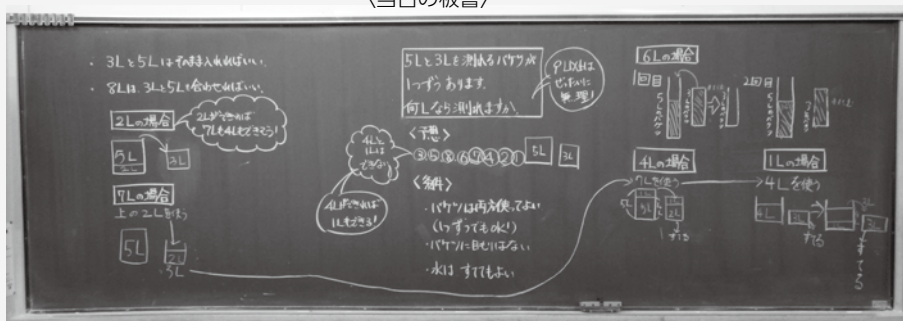
既に約80%の子どもたちが思考作文でA評価を取っている。そこで、7月から再生作文の宿題化を目指すことにした。宿題化の目的は、作文を家庭でも書かせることで、これまでよりも子どもたちの実態に寄り添った教材研究を行う回数を増やすことである。

子どもたちにとって、家で作文を書く際に手掛かりとするのが授業ノートである。ここで、大きな課題が一つ生まれた。それは、「全ての子どもたちに、作文を書くためのノート創りができる力をつける」ことである。そこで7月は、子どもたちのノート創りの力を鍛えるために授業を工夫することにした。

授業の号令を行うときに子どもたちにこう伝えた。「今日から、再生作文を書くときは、黒板ではなく自分のノートだけを見て書いてもらいます。だから、授業が終わったら、板書を消しますよ。」すると、子どもたちは不安な表情で、「えーっ、難しそう」「書けないかも……」とつぶやいた。しかし、授業が始まると、子どもたちの雰囲気が変わった。いつもとは違う。背筋をピンと伸ばす子、じっと私を見つめながら鉛筆を構えて待つ子など、どの子からも「しっかり聞こう!」「何も漏らさないようメモしよう!」という気迫が伝わってきた。

私は子どもたちに、考えながらノートを創らせるために、本時は、いつものように黒板の左側

〈当日の板書〉



から右側に向けて進んでいくのではなく、中央⇄左⇄右と板書の場所を変える。こうすることで、授業の流れを理解しながらノートを創らないと、作文を書くときに授業をうまく再生することができない。

黒板の中央から問題を書き始めると、「えっ! 何これ?」「なんか変!」と、戸惑う声が上がったが、すぐに集中力を取り戻した。次に、左

側から板書を始めると、「先生って、どれだけ意地悪なの!」と不満の声が上がった。それでも、子どもたちの心は折れなかった。友達の説明がよく聞き取れないときには、「もう少し、ゆっくり説明して」と声をかけたり、意味が分からないとき

6

成果と考察

本研究に取り組んだことで、今までよりもクラスの実態に寄り添った教材研究ができるよう

〈当日の子どものノート〉

自分の言葉で書けるようになった「まとも」

どういうこと?」と問いかけたりする姿が見られた。右側の板書が終わると、「先生、〇〇と△をつなげてください」とか、板書を指さしながら「その矢印の意味を教えてください」と手を挙げた。そんな子どもたちの姿から、最後まで意欲と集中力が保たれていることが分かった。

本時の再生作文を読むと、板書を手掛かりにして書いたものと変わらない内容のものばかりだった。全員の作文を読み終える頃には、私の中にあった不安はすっかり消えていた。

になった。その結果、問題の出し方や発問の仕方などが変わり、子どもたちの姿にも変容が見られた。

《子どもたちの変容》

ア 板書の内容を理解しているのか、確認しながらノートを創るようになった子が増えた（その結果、全ての子どもがマイノートを創るようになった）。

イ 人の話を聞き取ることができなかったときや、説明の意味が理解できなかったときに、「もう一度説明してください」と声に出すことができる子どもが増えた。

ウ 教師や友達の説明を聞いて、自分の考えが変わっていく楽しさを感じることができた子が増えた（自分の考えをもてるようになった子が増えた）。

エ 自分の考えを説明するときに「例えば」「つまり」「まず」「次に」などの言葉を使うことができるようになり、説明が上手になった子が増えた。

オ 作文を書くことが好きになった子が増えた。

カ 本時までの学習内容を理解し、必要に応じて活用できるようになった子が増えた。

以上の成果をもたらした要因を次のように考察した。

ア 授業を作文にすることで緊張感が生まれ、集中力を高めることができた。

イ 授業を作文にするので、人の説明を聞き取る必要感が生まれた。

ウ 人の話を聞き取ることができるようになったので、自分の考えと比較することができるようになった。

エ 授業に沿って作文を書くことで、順序立てて話すことがうまくなった。

オ 作文を書く経験を積むことができたので、書き方が分かってきた。

カ 授業の内容を理解できている子が増えた。

また、本研究を通して、子どもたちは帰納的に考えることができた授業は作文に書きやすいということ。感想文や思い出作文を書くことが苦手な子でも、再生作文なら事実を基に再生するので、書きやすいということも学んだ。

※この実践の一部は、筑波大学附属小学校・田中博史先生の「算数作文」のアイディアを参考にさせていただきました。

受賞の言葉

埼玉県日高市立高萩小学校

岡田淳史



この度は、このような賞を戴けたこと、とても有り難く思います。この研究は、4年前に拝聴した筑波大学附属小学校の田中博史先生のお話をヒントに、自分なりに試行錯誤を重ねながら取り組んできたものです。論文の推敲にアドバイスをしてくださった先輩・上司の方々。完成した論文を読んで感想を伝えてくれた同僚たち。そして、研究に行き詰ったときに問いかけると、素直に思いを語ってくれた子どもたち。子どもの頃から手のかかる私の周りには、優しい人たちがいてくれました。

この研究を始めるまでは、発言の回数や説明の

仕方、授業後に集めるノートや授業感想など、その時点での評価をしていました。しかし、それでは授業中に子どもたちの思考がどのように変化していくのかが分かりません。そこで、私は、「再生作文」を考えました。そうすることで、子どもたちを評価する視点が「点から線」へと変わり、考えが変わった理由や発言と発言のつながりなど、これまで点としか見えていなかったものを関連付けて見ることができるようになりました。私の実践が、読んでいただいた先生方のヒントやこれからの研究のきっかけになれば幸いです。